

〔資料〕

『浄土愚鈍念佛集全』翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

京都市右京区嵯峨鳥居本化野町所在の浄土宗華西山東漸院化野念仏寺の中興開山直蓮社到誉上人寂道真愚和尚が正徳三年（一七一三）五月に京都の書肆上村四郎兵衛から開版した『浄土愚鈍念佛集全』を翻刻紹介する。

山城国葛野郡北嵯峨の化野は阿太志野・徒野・仇野とも書き、兼好法師が『徒然草』に「あだし野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ちもさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそいみじけれ。」（岩波新日本古典文学大系本）と記した著名な一文を引くまでもなく、古くは東山の鳥辺山とともに風葬の地、火葬の地として知られた。現今、嵯峨周辺は京都を代表する観光名所となり、とくに八千余体の無縁石仏を「西院の河原」と称し、蠟燭を灯してこれをお供養する八月二十三・二十四日の千灯供養会には信じがたいほどの善男善女の参詣で賑わう。衆庶の人気を集める化野念仏寺であるが、しかしその歴史は存外知られていない。伝蔵される文献資料も多いとはいえず、寺史を説いた書物も前住職三十五世の原説蒼辨雄師の『愚沙あだし野念仏寺誌』（昭和五十三年六月、あだし野念仏寺刊）があるばかりである。

同書にその一部が写真掲載された縁起資料を翻刻してみると、

嵯峨化野念仏寺建立縁起

傳聞山城の國上嵯峨化野と云所は昔弘法大師兩部の曼多羅をかけ置釈迦彌陀の二尊を右に造り加持し給ふ末世の亡者の死骨を此野に納めば

悉浄土に引導せんとの御か持なりそれより此所に葬、処の墓其數をしらす其石仏と曼多羅をかけられし所今に曼多羅橋とて是ありこれ五三昧のはしめなり其後圓光大師此処の無常を觀ししまし
圓光大師御衣をも□の土をふるひてのた
浄土に送らんとの御誓なりと今に其□間餘地の底まで砂利一ツもなしこれ思儀のいたりならずや尔るに中古より此所に庵を結び不斷念仏を始め三万日に過たり當所の領主□の大門様より境内百間餘賜り寺号を

とあって、この念仏寺の地は弘法大師が兩部曼荼羅を懸け、釈迦・彌陀の二尊を石に造って亡者の死骨を納めた五三昧の地で、今に名残の曼荼羅橋が残る。此の地はまた円光大師法然上人が土を篩って整え不斷念仏の道場を開いた聖地である由が綴られている。この縁起は昭和二十三年の庫裡修繕時、襖の下張から出てきたものという。おそらく仮綴装木版数丁の略縁起だったと思われる。

また昭和二十七年四月の本堂拡張工事の際に本尊下の物入れから発見されたという『中興寂道和尚願文』なる資料の一部が写真掲載されている。これも翻刻してみると、

大日本國山城州嵯峨化野弘法大師加持之所圓光大師觀想之場也圓光大師當五百年忌令草創畢南無阿彌陀佛南無大悲觀世音南無大勢至

南無地藏大士南無虚空藏一切三寶一切

諸神傳來祖師父母六親眷屬十界群類

皈命一心 伽藍建立 佛法增耀

称名相續 万靈普益 同生安樂

寂寂道備前岡山素性父桓武之末平是利

廿六代平位幸晴母清和之末黒田如水之孫

寛文十三癸丑十二月廿五日出生法藹廿一年行

年三十九正徳元辛寅十一月十五日念佛寺開

山京阿弥陀寺隱居也

願曰

佛法遐代隆 伽藍弥栄 法界為利益

我必在浄土 此像中移 萬人滿諸願

寺内有凶事 此像異現 諸人令告知

惡僧在住持 此像現威 此寺令別離

歸命盡十方 無碍光如來

願以此功德 平等施一切

同發菩提心 往生安樂國

正徳二千辰天正月廿五日

寂道拜〔花押〕
行年四十歳鏡向造

と読めるようであり、これに続く文章が同書に翻刻されている。そこには、

覺譽意哲上人

父大譽真覺如海居士

湛譽本愚上人

母明譽理照盈月信女

法縁中

入譽心覺了空居士

弟子中

黒田氏唯澄同妻

檀那中

同姓熊太良

結果中

同 ヲテル女

代々僧

同 ヲタカ女

当山鎮守大弁財天女御眷属中

哀愍覆護我 令法種増長

此世及後生 願仏常撰受

眼内二種 納

剃毛 爪

直蓮社到譽上人寂道真愚和尚

とあって、この『中興寂道和尚願文』の出現によって初めて当寺中興の寂道和尚が黒田官兵衛の外孫の子息であったことを知り得た由が説明されている。福岡藩祖官兵衛黒田孝高（一五四六―一六〇四）の孫娘は、公的には嫡子福岡藩初代藩主黒田長政（一五六八―一六二三）の四人の娘が知られているが、その中に寂道和尚の母の名はない。

※

明治三十七年（一九〇四）、念仏寺の寺域内外に散乱埋没していた古石塔・古石仏数千を集めて整理し、これを「西院の河原」と称し、その開眼供養のために千灯供養が執行された。この事業が福田海会員の無償の労作によって行われたことを知る人は少ない。福田海（現本部・岡山県全備市）は中山通幽師（一八六一―一九三六）が創始した宗教。通幽師は岡山県高梁の人で、修験道当山派の山伏として活躍するかたわら井上円了の哲学館に学び、大阪に関西哲学館を開いて神儒仏に老荘を融合した独特の宗教哲理をもとに陰徳積善の功德を説いた。実践を重んじ、その生涯にわたり福田行を行じて塵中の菩薩と称せられ、全国各所において放置されていた無縁墓を集めて祭壇を築き、千灯供養によって供養した。その数は二十万基を超えるといわれ、念仏寺のほか昭和四年には滋賀県蒲生の石塔寺の八万四千基を整備している。墓王と崇められた所以である。昭和二年郷里の岡山に帰り、吉備中山の有木山青蓮寺を聖地とし、牛馬供養のはなぐり塚を創祀した。年間数万個の牛の鼻輪（鼻環、鼻ぐり）が納められ、現在までに六百八十万をはるかに超えるという。

※

念仏寺を中興開山した寂道は、当初この地が弘法大師の定めた三昧所跡であり、宗祖円光大師が観想の道場を設けた宗門の聖跡「あだし野」であることを知らなかった。『愚鈍念佛集』によれば、正徳元年（一七一）十月二十日夜に見た「古今不思議の霊夢」に導かれて嵯峨清涼寺を参詣した寂道は、ついにながら西山の景を見立て、「閑居して念仏を申さんと心がけ、こゝかしこ」歩くうちに寂々たる「墓原」に至り、行き交った杣人からこの地が「あだし野」という弘法・円光両大師ゆかりの聖跡であることを細々と聞かされたのであった。杣人は「弘法大師が曼陀羅をかけられし

所も今にあり」という。あたりを尋ね巡り、夢に見た石仏を見出して歓喜し、「軒もおち、堂もかたぶき、なにやらんわけもなき」寺を訪れた寂道は、門弟たちの同心を得て、この寺を新たに念仏道場として建立したのである。

道場建立は『中興寂道和尚願文』にあるように正徳元年十一月十五日に相違なく、それはまた円光大師の五百年忌を期しての草創だった。おそらく開山会式の執行は『願文』の記された正徳二年正月二十五日だったと思われるが、とすれば、霊夢を得てから開山会式に至る念仏寺中興開山事業はまことに短期間裡に遂行されたのであり、正徳三年五月の『愚鈍念佛集』の版行も、当然その重要な一環であったと理解されるのである。

寂道が建立したという念仏寺の現本堂には、湛慶作と伝える本尊阿弥陀如来像とともに開基長寿院殿木坐像と中興到誉上人木坐像が安置されている。到誉上人寂道は『願文』にその母が黒田如水の孫と記して出自を明かしているが、『願文』には黒田姓の施主者が並んでいて、念仏寺の中興にこの黒田一族の少なからぬ外護があったことを示している。当寺の開基と伝えられる長寿院殿もおそらく一族と推量されるが、しかしその履歴はほとんど不明であって、寂道の行実についても『願文』と『愚鈍念佛集』に記された範囲を出ないのである。寂道は平是利二十六代の末裔平位幸晴を父に、黒田如水の孫を母に、寛文十三年（一六七三）十二月二十五日に備前岡山に生まれ、十九歳で出家し、法蘭二十一年を数えた正徳元年辛寅十一月十五日、三十九歳の時に念仏寺を中興開山したのである。みずから「念佛寺開山京阿弥陀寺隱居也」と記す京阿弥陀寺は、おそらく京極鞍馬口（上京区寺町通今出川上ル鶴山町）の蓮台山惣見院阿弥陀寺をいうのであろう。

阿弥陀寺はのちに東大寺大仏殿勸進職にも就いた玉誉清玉が天文二十四年（一五五五）近江坂本に創建した浄土宗寺院で、清玉が織田信長の帰依を得て西京蓮台野芝薬師西町（今出川大宮東）に移転し、八町四方の境内に塔頭十一ヶ寺を構えた。当寺二十世常誉説音編『信長公阿弥陀寺由緒之記録』（『史籍集覧』第一二五冊所収）によると、天正十年（一五八二）六月二日本能寺の変の折り、清玉は二十余名の門弟とともに本能寺に駆けつけ、信長・信忠父

子および森蘭丸・棒丸・力丸兄弟はじめ家臣百有余名の遺骸を持ち帰り当寺に埋葬したという。寺は天正十五年（一五八七）鞍馬口に移されたが、おそらく寂道はこの阿弥陀寺で長い修行の日々を過ごしたものと思われる。法然の唱導した愚鈍念仏は諸師によってさまざまに解釈されてきたが、寂道が化野念仏寺を中興開山するにあたって、ことあらためて愚鈍念仏を主唱したのは、法然が死の直前に勢観房源智に託した『一枚起請文』の「たゞ一向に念仏すべし」という遺訓を実践する意思の表明にほかならない。同心する「愚鈍の弟子ども」は無知でのろまをいうのではない。愚かなほどに無心に念仏を称えるものたちをいうのである。

※

浅学にして念仏寺中興寂道に著作のあるを知らない。このたび翻刻紹介する宮島コレクション蔵『浄土愚鈍念佛集全』は他に伝本のあるを知らない。本書は縦二二〇mm・横一五七mmの袋綴装。紺色の紙表紙に木版の題簽が付されている。本書には旧蔵者とおぼしい出羽国仙北郡平鹿邑横手専称寺の義愼なる僧の乱暴な戯書があり、また汚損も激しかった。これを洗滌し、裏打ちを施した丁面見開きの状態の画像を示した。なお翻刻にあたっては底本の字体表記をできうる限り尊重した。翻刻文作成に恩田寛子さん（歴史文化学科三年生）の助力を得、仏教大学名誉教授で嵯峨梅ヶ畑福泉寺住職の成田俊治師・厭求上人ゆかりの導故院住職杉田正善師の二方からは大切なお教えを賜った。御礼申し上げる。



寂道上人木坐像
（あだし野念仏寺蔵 恩田寛子撮影）



(白丁)

「表表紙見返



「表表紙

愚鈍念佛集 并化野建立由来

正徳元年の冬十月廿日、夜、古今不思議の
是夢を見て、嵯峨清涼寺へ参詣し、つくぐ思ふ
に、夢に見し佛は座像にてありし。是は立て居給へ
ば夢想とたがひたり。是より大佛へ参らむやと
おもひ立歸るいとまに。つゝでながら。西山の景
を見立て。静なる所もあらば。閑居して念佛を
申さんと心がけ。こゝかしこありくに。さびくたる

念佛

るるに、此よりがひ骨ちまたにみち。しるし
もなき墓原なり。いかさま名有所やらんと
うかゞひ居る所に。杣人来れり。此はかはらは
何といへる所と尋けるに。あだし野と申て。
弘法大師加持の所なりと答へける。そのし
るしはいかにとへば。是なる火葬場を符じ
給ひ。それに又石佛の有は。弘法の御作也。
曼陀羅をかけられし所も今にありと。其

愚鈍念佛集 并化野建立由来

正徳元年の冬十月廿日の夜。古今不思議の
靈夢を見て。嵯峨清涼寺へ参詣し。つくぐ思ふ
に。夢に見し佛は座像にてありし。是は立て居給へ
ば夢想とたがひたり。是より大佛へ参らむやと
おもひ立歸るいとまに。つゝでながら。西山の景
を見立て。静なる所もあらば。閑居して念佛を
申さんと心がけ。こゝかしこありくに。さびくたる

念佛

一

はかはらに出たり。がひ骨ちまたにみち。しるし
もなき墓原なり。いかさま名有所やらんと
うかゞひ居る所に。杣人来れり。此はかはらは
何といへる所と尋けるに。あだし野と申て。
弘法大師加持の所なりと答へける。そのし
るしはいかにとへば。是なる火葬場を符じ
給ひ。それに又石佛の有は。弘法の御作也。
曼陀羅をかけられし所も今にありと。其

後圓光大師も来り給ひ。無常を觀じ土を
ふるひ給へりと。こまぐと語捨て行けるまゝ。
たづねめぐるに。かの石佛を見付侍るに。阿弥
陀はあまりことふりて。目も鼻もさだかならず。
釈迦は面兒殊勝におがまれ給ふに。能々
拜すれば夢に見し佛にてあり。餘り有
がたく寺へ立よりて。やうすを尋るに。又軒
もおち堂もかたぶき。何やらんわけもなき
と申り堂もくつと。何やらんわけもなき

念佛

二

と申り。われ我は得させば。閑居の所に
せんと思ひしに。みなく申やうは。此所もはや滅
亡仕候まゝ。御じひに御とり立候へと。口々に
ねがひける。心にのぞむ所なれば建立を企
て。心静に佛名をも唱へ。中ぐに山のをく
こそ住よき心地して。信心の友をあつめて。
朝暮化野の無常を見て。我身の行末の事
のみ思ひくらす暇に。門弟たちの尋ね給へる

後圓光大師も来り給ひ。無常を觀じ土を

ふるひ給へりと。こまぐと語捨て行けるまゝ。

たづねめぐるに。かの石佛を見付侍るに。阿弥

陀はあまりことふりて。目も鼻もさだかならず。

釈迦は面兒殊勝におがまれ給ふに。能々

拜すれば夢に見し佛にてあり。餘り有

がたく寺へ立よりて。やうすを尋るに。又軒

もおち堂もかたぶき。何やらんわけもなき

念佛

二

さまなり。あはれ我に得させば。閑居の所に

せんと思ひしに。みなく申やうは。此所もはや滅

亡仕候まゝ。御じひに御とり立候へと。口々に

ねがひける。心にのぞむ所なれば建立を企

て。心静に佛名をも唱へ。中ぐに山のをく

こそ住よき心地して。信心の友をあつめて。

朝暮化野の無常を見て。我身の行末の事

のみ思ひくらす暇に。門弟たちの尋ね給へる



ことを。心に残りし事をこたへ侍るも。きゝ
 やすくして。又暫の信心も起れかしと。世
 間の言を拾ひて。心やすくすかしけるも。
 愚鈍の弟子どもへの教訓なれば也

嵯峨化野 寂道真愚

【念佛

三】

(白丁)

愚鈍念佛集

寂道和尚の答 弟子共の尋

一 丹波坊和尚は尋て「世間よは法は
ぐの法談種々の御勸御座候。誦他經物
の初。又は他宗などいかふ御しかりにて御座候
へども。私どもの安心にはなりがたく覚申候。
いかゞ承り可申候や 和尚のいはく。末世に
なれば。人毎に不覺しても宗門の事をば
珍敷もおもはず。夫故に何がなとはやら

念佛

四

かして施物をもあつめ。建立もいたした
きとて。餘經や世法を取て勸化にな
す。されば面白など、申て悦ぶ愚人有
ゆへに。夫にのつてすゝむる悪知識もあ
り。夫は安心にはかまはず。奉加をすゝむる
と聞給ふべし。又他門をよからぬやうに
申もいらぬ事なるべし。他宗からは浄土
宗をも又あしく申べし。すこしづゝ相違

愚鈍念佛集 寂道和尚の答 弟子共の尋

一 丹波坊和尚に尋て申さく。世間に此比さま
ぐの法談。種々の御勸御座候。誦他經物
の初。又は他宗などいかふ御しかりにて御座候
へども。私どもの安心にはなりがたく覚申候。
いかゞ承り可申候や 和尚のいはく。末世に
なれば。人毎に不覺しても宗門の事をば
珍敷もおもはず。夫故に何がなとはやら

念佛

四

かして施物をもあつめ。建立もいたした
きとて。餘經や世法を取て勸化にな
す。されば面白など、申て悦ぶ愚人有
ゆへに。夫にのつてすゝむる悪知識もあ
り。夫は安心にはかまはず。奉加をすゝむる
と聞給ふべし。又他門をよからぬやうに
申もいらぬ事なるべし。他宗からは浄土
宗をも又あしく申べし。すこしづゝ相違

有ゆへこそ。いろ／＼宗旨も立られた
り。同じやうにいかばそれ／＼の宗門はいら
ぬ事なるべし。されども学者など出合て
法問などいはず。随分是非の沙汰は致す
べし。たゞ我も人もはらもたてず。我有
縁の法を信心して。我慢をおこさぬこそ
よろしく侍る。又学者ならば一宗の事にて
いかほども談議もなり。博學ならば念佛

念佛

五

乃一門にて種々に説申すべきに。あれはと
かゝるは名聞のやうに見ゆるなり。浄土宗
にて浄土の外はしらぬと申さんに。恥
敷事は有まじ。たゞ人にかまはず御
文よむなりの。心もちにて念仏申給へ
一越前坊尋て申様。浄土宗に捨世と申
はいかゞ心得申べきや。和尚いはく。どれく
も欲を捨て。家を出るを僧とは申せ。然

有ゆへこそ。いろ／＼宗旨も立られた
り。同じやうにいかばそれ／＼の宗門はいら
ぬ事なるべし。されども学者など出合て
法問などいはず。随分是非の沙汰は致す
べし。たゞ我も人もはらもたてず。我有
縁の法を信心して。我慢をおこさぬこそ
よろしく侍る。又学者ならば一宗の事にて
いかほども談議もなり。博學ならば念佛

【念佛】

五

の 一門にて種々に説申すべきに。あれはと
かゝるは名聞のやうに見ゆるなり。浄土宗
にて浄土の外はしらぬと申さんに。恥
敷事は有まじ。たゞ人にかまはず御
文よむなりの。心もちにて念仏申給へ
一越前坊尋て申様。浄土宗に捨世と申
はいかゞ心得申べきや。和尚いはく。どれく
も欲を捨て。家を出るを僧とは申せ。然



念佛

共天子將軍などの貴命に依て住持職
も致す事なるに金銀などやけいはく
あてちをもとめ。こしのり物侍など
美々敷行列を立て。紫衣黄衣など
ひらめかし。佛の事はうとくしく。在家
のつとめを大切にするゆへに。夫を世間
僧と申なり。他宗はしらねども。我宗門
にては佛の御誓にもなく。祖師も黒

(絵①)

【念佛】

六

共天子將軍などの貴命に依て。住持職
も致す事なるに。金銀などやけいはく
にて寺をもとめ。こしのり物侍など
美々敷行列を立て。紫衣黄衣など
ひらめかし。佛の事はうとくしく。在家
のつとめを大切にするゆへに。夫を世間
僧と申なり。他宗はしらねども。我宗門
にては佛の御誓にもなく。祖師も黒

夜うそをいふ。称念上人乃御すゝめこそあ
りかたけれ。子思と云人は一生つゞりを着
てくらし。顔淵と云人は一期一ひさごに
て過ぎも。心ざしよければ聖人とよばれ
たり。外むきはかざらずとも。内証をよく
つゝし給へ。紫衣黄衣は座頭も山伏
も着る事なり。又寺領社領は佛神へ
付てあるに。知行いか程有など、申て

念佛

七

佛神への灯明もあげずして。私の用に
つかひなす事はむげなる事に候へ。祖師
は歩にて参内などもありし。よくく祖
師に似給へ。親に似ぬ子をは鬼子と申
事。能合点し給へ。いはんや捨世寺を
遁て。又黄衣など着るおろかなる人
もあり。うたてき迷ひざまなり
一山城坊尋て申やう左様の事は知識

衣にて在せは。称念上人の御すゝめこそあ

りかたけれ。子思と云人は一生つゞりを着

てくらし。顔淵と云人は一期一ひさごに

て過ぎも。心ざしよければ聖人とよばれ

たり。外むきはかざらずとも。内証をよく

つゝし給へ。紫衣黄衣は座頭も山伏

も着る事なり。又寺領社領は佛神へ

付てあるに。知行いか程有など、申て

【念佛

七

佛神への灯明もあげずして。私の用に

つかひなす事はむげなる事に候へ。祖師

は歩にて参内などもありし。よくく祖

師に似給へ。親に似ぬ子をは鬼子と申

事。能合点し給へ。いはんや捨世寺を

遁て。又黄衣など着るおろかなる人

もあり。うたてき迷ひざまなり

一山城坊尋て申やう左様の事は知識

念佛

八

【念佛】

08
ウ

08才

尋る人もなし。くちなわにまとはれて居
れともそねみねたみもせず。生る内斗の
人のなさけ。苔の下まではかゝらぬ心のは
かなさ。たれとても此すがたなりと心得は。
神ばかりは能所へとねがひ給へ。惣じて人間
の苦樂は色と欲とにあり。はなれば安樂
なり。離れがたきは苦勞なり。骸骨が
いこつにたはふれたるふぜい。草紙にも見

念佛

九

えし。欲ゆへには夜昼もくるしき事ば
かりなり。夫は衣食住の三つに有こと也。
野山にすむとても。飢こゝえて死するも
のはまれなり。けつく山にすむ鹿。水に
およぐ魚などはよくこへて居るなり。過分
の衣食を望むゆへには。おほくの難儀も
するものなり。神農は木の葉をつり
てめし。天照太神は茅ぶきの住居。

【念佛】
九
えし。欲ゆへには夜昼もくるしき事ば
かりなり。夫は衣食住の三つに有こと也。
野山にすむとても。飢こゝえて死するも
のはまれなり。けつく山にすむ鹿。水に
およぐ魚などはよくこへて居るなり。過分
の衣食を望むゆへには。おほくの難儀も
するものなり。神農は木の葉をつり
てめし。天照太神は茅ぶきの住居。

【念佛】

九

【念佛】
九
えし。欲ゆへには夜昼もくるしき事ば
かりなり。夫は衣食住の三つに有こと也。
野山にすむとても。飢こゝえて死するも
のはまれなり。けつく山にすむ鹿。水に
およぐ魚などはよくこへて居るなり。過分
の衣食を望むゆへには。おほくの難儀も
するものなり。神農は木の葉をつり
てめし。天照太神は茅ぶきの住居。

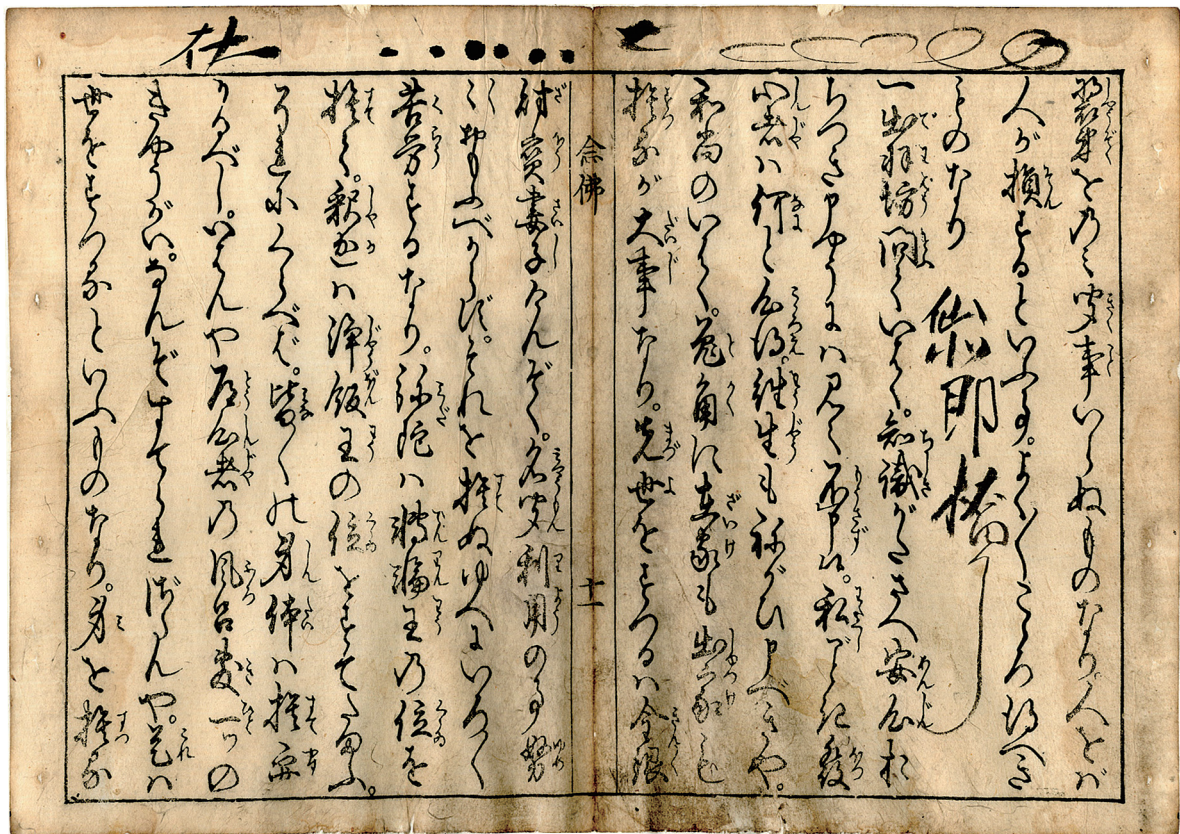


(絵②)

【念佛】

十

釈尊は草の座にまします。先祖は皆かく
 のごとく。今の人のおごるにくらべて見給
 へ。今の儒者、醫者、佛者の。紗綾綸子
 など先祖にこへたり。是は皆人其徳を
 しらず。衣服の見事なるを尊しとお
 もふ故に。自かざる心も出ると見えたり。
 依法不依人として。薬は病のなをるを
 のみ。法は安心のおちつくのを聞て。必



装束をのみ聞事いらぬものなり。人をば
人が損するといふ事。よくくこゝろ得へき
ものなり

一出羽坊問ていはく。知識がたさへ安心お
ちつき申やうには見え不申候。私ごとき發
心者は何と心得。往生もねがひ申べきや。
和尚のいはく。免角に在家も出家も
捨るが大事なり。先世をすつるは金銀

【念佛

十一】

財寶妻子けんぞく。名聞利用の事努
々おもふべからず。それを捨ぬゆへにいろく
苦勞するなり。弥陀は轉輪王の位を
捨て。釈迦は淨飯王の位をすてたまふ。
それにくらべば。皆くの身体は捨安
かるべし。いはんや道心者の風呂敷一つの
きやうがい。なんぞすてられざらんや。是は
世をすつるといふものなり。身を捨る

し衣服をかざらず。布もさらしも同じ
事とおもへば。小袖より木綿はとこのひや
すき物なり。みのを着ても雨さへふせげ
ば。びらうどの合羽も同じ事よと心得。
佛につかへたまへ。これが身を捨て云
もの。さて心をすてるとは。外の人は何
事にさはぐ共色にふけらず。欲のお
こらぬやうに其身さへたゞしくは。人の見

念佛

十二

聞よ。かまはず。海の魚に塩のしまぬやう
に。水鳥の水にぬれぬやうに心得て。や
がてはいか。ちりになすべき身なりとお
もひ。佛につかへ。内の心を能おさへねは
外むきばかり能しても。犬のつぶてに
くいづくやうにて。つぶてやみがたし。内を
よく心得は鹿の人を追ふがごとく。ひとり
悪念も止べし。惣して娑婆を捨て

とは衣服をかざらず。布もさらしも同じ

事とおもへば。小袖より木綿はとこのひや

すき物なり。みのを着ても雨さへふせげ

ば。びらうどの合羽も同じ事よと心得。

佛につかへたまへ。これが身を捨て云

もの。さて心をすてるとは。外の人は何

事にさはぐ共色にふけらず。欲のお

こらぬやうに其身さへたゞしくは。人の見

【念佛

十二】

聞にかまはず。海の魚に塩のしまぬやう

に。水鳥の水にぬれぬやうに心得て。や

がてはいか。ちりになすべき身なりとお

もひ。佛につかへ。内の心を能おさへねは

外むきばかり能しても。犬のつぶてに

くいづくやうにて。つぶてやみがたし。内を

よく心得は鹿の人を追ふがごとく。ひとり

悪念も止べし。惣して娑婆を捨て

流轉するなり。此界を捨る人は浄土を
する人なり。能く心得たまへ。身を捨
ててこそうむせもあまのいづも也
一近江坊問ていはく。大方信心の起し
やうも得心仕候が。御念仏申やうは何と
してくだいなきやうにいたし申べきや。
和尚のいはく。御念仏はおのゝごときの
智恵もなく。才覚もなき役にたらず

念佛

十三

をすくいし。願なれば。となへだにせば
往生するなり。たゞし弥陀も不取正覺
のちかひあり。諸佛證人に立給へり。祖
師も誓紙を書給へば。我等も命終
まで。けだいたすまいとちかひを立
て。いかふもおほく申給へ。祖師も念
佛は相續をとると仰られたり。今の
僧たちは珠数もとらず。念仏など申

流轉するなり。此界を捨る人は浄土を

する人なり。能く心得たまへ。身を捨

てこそうむせもあまのいづも也

一近江坊問ていはく。大方信心の起し

やうも得心仕候が。御念仏申やうは何と

してくだいなきやうにいたし申べきや。

和尚のいはく。御念仏はおのゝごときの

智恵もなく。才覚もなき役にたらず

念佛

十三

をすくいし。願なれば。となへだにせば

往生するなり。たゞし弥陀も不取正覺

のちかひあり。諸佛證人に立給へり。祖

師も誓紙を書給へば。我等も命終

まで。けだいたすまいとちかひを立

て。いかふもおほく申給へ。祖師も念

佛は相續をとると仰られたり。今の

僧たちは珠数もとらず。念仏など申



念佛

十四

ものをはぐちくとしたなど申てさとり
たがほにて居る。しからば祖師の八万遍
の十万遍の申しひは。わらふべきや。
途行道心者。尼長老に念佛となへて
通るはすくなし。かなしき浄土宗の行人
なり。はぢたまへく
一嵯峨坊問ていはく。随分をのく情に入
となへ候へども。真実も出がたく。又きつ

(絵③)

【念佛】

十四

ものを。ぐちくとしたなど申てさとり
たがほにて居る。しからば祖師の八万遍
の十万遍のと申給ひしは。わらふべきや。
途行道心者。尼長老に念佛となへて
通るはすくなし。かなしき浄土宗の行人
なり。はぢたまへく
一嵯峨坊問ていはく。随分をのく情に入
となへ候へども。真実も出がたく。又きつ

ありがたくも覚え申さぬは。いかやうの咎に
て候や。和尚のいはく。つねく申せばこそ
時々なみだもこぼれるなり。真があれば
こそうたがはずにとなへるなり。常住に
なきくは申されまじき事なり。され共
今程念仏申のおほきことはなけれども。
みなしぶかきことくなり。外はよほど後
生に色付とも。内はしぶし。あたりとなり

念佛

十五

嫁や子どもの前をはぐかりて。寺参をし
念仏は申せども。なましくてよき往生人
まれなり。後生は願勝なり。人の為とは
思ふべからず。地獄にてかはりてくれる
人はなし。唯佛ばかりなり。能たのみて
をき給へ。病氣付ての。又は年よりての
と申て。俄に死ぬる時は日暮にみちを
急ぎ。呑のかはく時に井戸をほりては。

ありがたくも覚え申さぬは。いかやうの咎に
て候や。和尚のいはく。つねく申せばこそ
時々なみだもこぼれるなり。真があれば
こそうたがはずにとなへるなり。常住に
なきくは申されまじき事なり。され共
今程念仏申のおほきことはなけれども。
みなしぶかきことくなり。外はよほど後
生に色付とも。内はしぶし。あたりとなり

念佛

十五

嫁や子どもの前をはぐかりて。寺参をし
念仏は申せども。なましくてよき往生人
まれなり。後生は願勝なり。人の為とは
思ふべからず。地獄にてかはりてくれる
人はなし。唯佛ばかりなり。能たのみて
をき給へ。病氣付ての。又は年よりての
と申て。俄に死ぬる時は日暮にみちを
急ぎ。呑のかはく時に井戸をほりては。

ふふあふふ。用心に國ほろびずとも油
断はかたきともゆふ事あり。同年の者も
死に。隣の人も死に。跡へはかへらす。生れ
る月日はとをくなる。死ぬる月日はちか
くなる。さりとはあぶなき世中なり。後
悔先に立ず。よく分別あるべし。さてまた
信の起らぬは。三惡道へ歸るへき下地なり。
されば三條の橋にて。知らぬ人に逢は

念佛

其

何とも有まじ。縁なきゆへにひとたびも見
し人にあはゞ行過たり共なつかしき心地
もするなり。久しく惡道のすまひをなし。
初て聞ゆへに信もおこらぬなり。少にても
佛に縁ある人は。なみだもこほし身の
毛も立て悦ぶなり。此人は往生もたの
もしく候へ。念仏は砂をかむやうに覺ゆるは
三惡道ちかし。小寒の氷大寒に解るは。春

間にあうまじ。用心に國ほろびずとも油
断はかたきともゆふ事あり。同年の者も
死に。隣の人も死に。跡へはかへらす。生れ
る月日はとをくなる。死ぬる月日はちか
くなる。さりとはあぶなき世中なり。後
悔先に立ず。よく分別あるべし。さてまた
信の起らぬは。三惡道へ歸るへき下地なり。
されば三條の橋にて。知らぬ人に逢は

【念佛】

十六

何とも有まじ。縁なきゆへにひとたびも見
し人にあはゞ行過たり共なつかしき心地
もするなり。久しく惡道のすまひをなし。
初て聞ゆへに信もおこらぬなり。少にても
佛に縁ある人は。なみだもこほし身の
毛も立て悦ぶなり。此人は往生もたの
もしく候へ。念仏は砂をかむやうに覺ゆるは
三惡道ちかし。小寒の氷大寒に解るは。春

のちきゆなり。年よりの信心起らぬは
地獄のちかく成ゆへ也。されば道心者の数珠
をくらぬと。年よりの小奇。祖母の白粉と
尼のかね付ると。後家の人あつめなどは合
点のゆかぬものなり。をのゝたしなみ給へ
一備後坊問ていはく。これより随分信心に
てとなへ申べく候へとも。念仏を申せは。何と
してわれらが善人とはなり申候や。和尚

念佛

十七

のいへく。信心強く唱へ候へば。凡夫の一心
が弥陀の一心とひとつに成ゆへに。如来の
功德がそのまゝ我等か功德と移ること。此
入物の水を外の入物にうつすがごとく。一
念のこゑの下に悪がきえて。功德が
移ると覚え給へ。青菜の虫も我に似
よといへば。目鼻足手が出来て似我蜂
となる。行人もそのごとく。南無あみた仏

のちかきゆへなり。年よりの信心起らぬは
地獄のちかく成ゆへ也。されば道心者の数珠
をくらぬと。年よりの小奇。祖母の白粉と
尼のかね付ると。後家の人あつめなどは合
点のゆかぬものなり。をのゝたしなみ給へ
一備後坊問ていはく。これより随分信心に
てとなへ申べく候へとも。念仏を申せは。何と
してわれらが善人とはなり申候や。和尚

【念佛】

十七

のいはく。信心強く唱へ候へば。凡夫の一心
が弥陀の一心とひとつに成ゆへに。如来の
功德がそのまゝ我等か功德と移ること。此
入物の水を外の入物にうつすがごとく。一
念のこゑの下に悪がきえて。功德が
移ると覚え給へ。青菜の虫も我に似
よといへば。目鼻足手が出来て似我蜂
となる。行人もそのごとく。南無あみた仏



念佛

十八

我に似ていふことなり。やがてあみだ
 に似て佛と成給ふへし
 一亀山坊問ていはく。さて能合点仕り
 有がたく覚え申候。此上はつねに臨終
 と心得て申べく候や。和尚いはく。いかにも能
 心得なり。臨終とおもひ申ても死なずは
 平生の念仏となり。平生とおもひ申ても
 死なば臨終の念仏となる。無常時を

(絵④)

【念佛】

十八

とは我に似よといふことなり。やがてあみだ
 に似て佛と成給ふへし
 一亀山坊問ていはく。さて能合点仕り
 有がたく覚え申候。此上はつねに臨終
 と心得て申べく候や。和尚いはく。いかにも能
 心得なり。臨終とおもひ申ても死なずは
 平生の念仏となり。平生とおもひ申ても
 死なば臨終の念仏となる。無常時を

まゝと。軍とて。衆とて。盗人にとて。繩をなひ。まにあふまじき事なれば。随分用心したまへ

一白河坊問ていはく。かやうに承候ても。餘の法の深妙を聞候へば。心まよひ申候。餘法と念仏といかゞ心得申べきや。和尚の云。華嚴經法華經などは。其理高ければ。山のごとし。修行の足たぬゆへに。いつれも

念佛

十九

ハのやりと。禪真言は其法ふかし。井のちのど。智恵の繩みじかくして扱と。念仏は子どもに菓子にあたふるかことし。餘の法は小判のこことし。をのく衆生は小児のごとくなれば。小判よりは口にちかき御念仏がよかるべし。これを使人欣慕の教門とも。又自然悟道の密意と

またす。軍をみて箭をはぎ。盗人をとらへて。繩をなひ。まにあふまじき事なれば。随分用心したまへ

一白河坊問ていはく。かやうに承候ても。餘の法の深妙を聞候へば。心まよひ申候。餘法と念仏といかゞ心得申べきや。和尚の云。華嚴經法華經などは。其理高ければ。山のごとし。修行の足たぬゆへに。いつれも

念佛

十九

はのぼりかたし。禪真言は其法ふかし。井のもとのごとし。智恵の繩みじかくして扱と。りがたし。念仏は子どもに菓子にあたふるかことし。餘の法は小判のこことし。をのく衆生は小児のごとくなれば。小判よりは口にちかき御念仏がよかるべし。これを使人欣慕の教門とも。又自然悟道の密意と申なり

一黒谷坊問ていはく。いよく安心おちつき
候へども。もし五重相傳仕らずはいかに候
や。和尚のいはく。それく五重相傳とは。
念仏申候へばかならず往生するといふこ
となり。是は人によるなり。相傳してう
かべだてにて不信心に成もあり。人參
で人をころすごとく。又相傳して信心つ
よく成もあり。人參で病がいゆるやうなる

念佛

二十

ものなり。悲哉近年は。裏屋などに道
場をくらふ。ぼろの布施物とりかすめ。
後世にすものなり。何とも焰魔の廳
にてうらの和尚より。相傳仕と断も
いかゞならん。當來佛國往生の手印を
とるには。鹿相成事どもなり。衣食とも
しくは。教のごとく托鉢をし。渡世の出家
はいらぬものなり。輕心輕法とて。かるく

一黒谷坊問ていはく。いよく安心おちつき
候へども。もし五重相傳仕らずはいかに候
や。和尚のいはく。それく五重相傳とは。
念仏申候へばかならず往生するといふこ
となり。是は人によるなり。相傳してう
かべだてにて不信心に成もあり。人參
で人をころすごとく。又相傳して信心つ
よく成もあり。人參で病がいゆるやうなる

【念佛

二十】

ものなり。悲哉近年は。裏屋などに道
場をくらふ。ぼろの布施物とりかすめ。
後世にすものなり。何とも焰魔の廳
にてうらの和尚より。相傳仕と断も
いかゞならん。當來佛國往生の手印を
とるには。鹿相成事どもなり。衣食とも
しくは。教のごとく托鉢をし。渡世の出家
はいらぬものなり。輕心輕法とて。かるく

うけては何の法にもやくにたつまじ。求
法のたためには身を捨るならひなり。わづか
の行がなりがたくは。佛には猶成がたかる
べし。行が成がたくは。唯平に念仏の数を
申給へ。但信称名亦復如是と仰られて。
色どりのなき白木。そのまゝの念仏がよ
き事なり。大師も愚鈍念仏第一と仰
られたぞ

念佛

二十一

一大坂坊問ていはく。聞にしたがひどれく
もよく合点仕候へとも。かごみゝにて明日
ははやわすれ申候。くだんの御しめしのやう
を。みじかく御書くだされ候はゞ。よりく
誦て見申度候。和尚のいはく。さる方より
もさやうのねがひありて。つゞりたる事
あり。此もんをうつして。かんきんにもふしを
付て成ともとなへたまへ

うけては何の法にもやくにたつまじ。求
法のたためには身を捨るならひなり。わづか
の行がなりがたくは。佛には猶成がたかる
べし。行が成がたくは。唯平に念仏の数を
申給へ。但信称名亦復如是と仰られて。
色どりのなき白木。そのまゝの念仏がよ
き事なり。大師も愚鈍念仏第一と仰
られたぞ

【念佛

二十一】

一大坂坊問ていはく。聞にしたがひどれく
もよく合点仕候へとも。かごみゝにて明日
ははやわすれ申候。くだんの御しめしのやう
を。みじかく御書くだされ候はゞ。よりく
誦て見申度候。和尚のいはく。さる方より
もさやうのねがひありて。つゞりたる事
あり。此もんをうつして。かんきんにもふしを
付て成ともとなへたまへ

静に世を觀するに
無常しばしの間なり
おもはざるこそふかくなれ
我身の程を忘れたり
山水よりもなをはやし
老て悲む人もあり
死て苦むものもあり
昨もたな引今もたつ
をくれ先立ためし有
化野朝暮の草の露

念佛

二十二

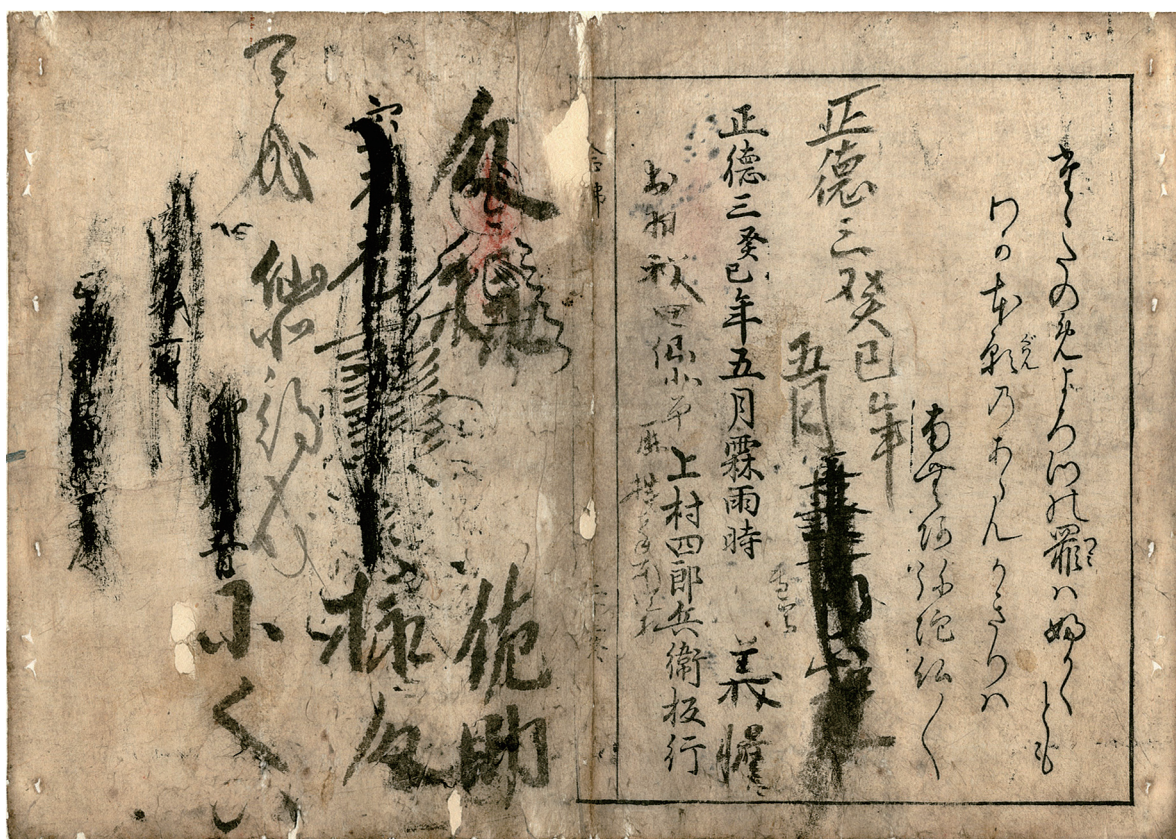
人間のたのしみは
風の前なるともし火よ
久しき責をいかゞせん
浄土のすゝめ丁寧也
生れあふたるさいはるよ
祖師のすゝめもこゝに有
旦暮いつとかわきまへむ
頭燃を払ふがごとくして
乗りをくれてはかなふまじ
教の名号唱ふべし

念佛

二十二

人間のたのしみは
風の前なるともし火よ
久しき責をいかゞせん
浄土のすゝめ丁寧也
生れあふたるさいはるよ
祖師のすゝめもこゝに有
旦暮いつとかわきまへむ
頭燃を払ふがごとくして
乗りをくれてはかなふまじ
教の名号唱ふべし

静に此世を觀するに
やがて捨らる此身をば
親疎同じく去行ど
人の命とゞまらず
若を樂む其うちに
生れて喜ぶ其跡に
鳥部野前後の夕煙
化野朝暮の草の露
無常しばしの間なり
おもはざるこそふかくなれ
我身の程を忘れたり
山水よりもなをはやし
老て悲む人もあり
死て苦むものもあり
昨もたな引今もたつ
をくれ先立ためし有



たゝたのためよろつの罪はふかくとも

わか本願のあらんかきりは

南無阿弥陀仏く

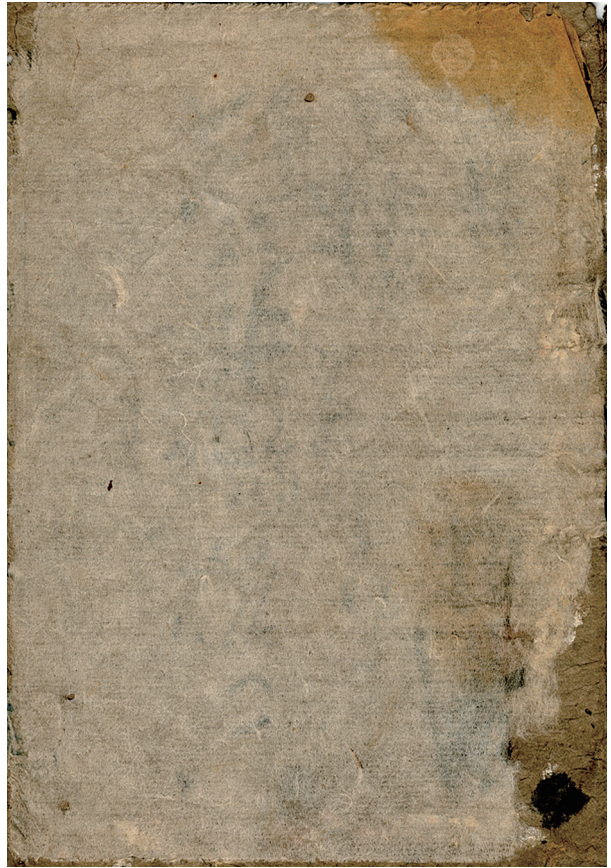
正徳三癸巳年五月霖雨時

上村四郎兵衛板行

【念佛】

二十三終

(白丁)



(せきぐち
しずお

歴史文化学科)

「裏表紙

(白丁)

「裏表紙見返